

(2) 三春と坂上田村麻呂の伝説（平安時代）

今からおよそ1200年前の平安時代は、都が京都にあり、貴族が政府の役人となって政治をしていました。

東北地方はそのころ、「みちのおくのくに」(陸奥国)とよばれ、京都の政府に抵抗していました。

それらを制圧するために、京都から「坂上田村麻呂」が征夷大將軍となって、この東北地方にやってきました。

9世紀のはじめの時期ですが、三春はそのころ、陸奥国安積郡として、今の郡山にあったとされている国の役所に治められていたので、この近くでの田村麻呂とのたたかいはありませんでした。

9世紀のおわりころまでには、東北地方の大部分が中央政府に支配されるようになりました。

三春にも、田村麻呂にむすびついた伝説がいくつも残されています。

田村大元神社、華正院馬頭観音、丈六仏、満願虚空蔵などのお寺や神社のいわれをはじめ、山や川、地名などにも田村麻呂のいわれが残り、古くから語りつがれてきました。

そのなかでも、子育駒、三春駒の伝説はあまりにも有名です。

この伝説は、三春駒のいわれについてのべてあり、実さいのできごとではありません。

実さいには、今の田村郡で田村麻呂との戦いはなかったのですが、田村麻呂と大多鬼丸のことは、三春駒の伝説として語りつがれてきたお話です。